

セイマ・トルビノ青銅器群分布の背景：ロストフカ 墓地の分析から

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1804164>

出版情報：史淵. 154, pp.1-25, 2017-03-17. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

セイマ・トルビノ青銅器群分布の背景

—ロストフカ墓地の分析から—

松 本 圭 太

1. はじめに

ユーラシア草原地帯の歴史を語る上で、しばしば注目されてきたのは、広範囲における移動あるいは交流関係である。中でも、スキタイ系文化や、モンゴル帝国などに見られる草原地帯東部から西部への影響については、ここ数十年來盛んに議論されてきた。これらのうち、青銅器時代（前2千年紀前半）に遡るとされるのが、セイマ・トルビノ青銅器群の拡散である。セイマ・トルビノ青銅器群は、フィンランドから東シベリアの草原森林地帯にかけて分布する独特の青銅器群であり、その広大な分布に加え、複雑な形態の器種や、錫青銅を含むことから、注目を集めてきた。また本青銅器群は、その影響が中国初期青銅器にもみられることから、中国における初期冶金に関する研究においても言及される場合が多い。筆者は本青銅器群の広がりについて以前に論じたことがある（松本2011）が、前稿は主に青銅器の型式学的検討であり、青銅器を出土するコンテクストについては触れることは出来なかった。本稿ではこの点を検討するほか、当該期の社会動態についても考慮し、青銅器群分布の背景を明らかにすることを目的とする。その上で、草原地帯における青銅器時代の特徴というものを考えてみたい。

2. セイマ・トルビノ青銅器群の広がり

前稿（松本2011）の概要を示しておく。セイマ・トルビノ青銅器群に関しては、チェルヌイフによる一連の論考（Chernykh 2009a, 2009b）が広く知られている。そ

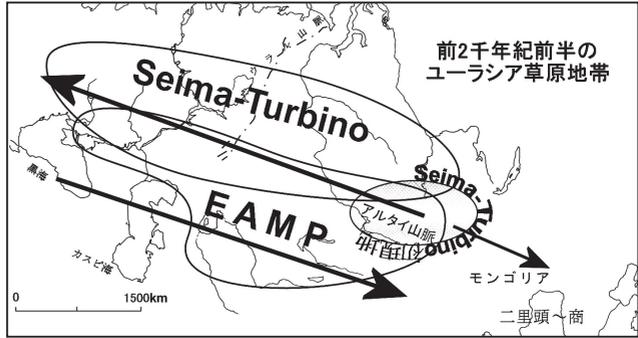


図1 チェルヌイフによる青銅器文化拡散モデル

れに従えば、前3千年紀末から前2千年紀にかけては、ユーラシア草原地帯ではEurasian Metallurgical Province (EAMP)（ユーラシア冶金圏）が形成される時期であり、西から東への波としてアヴァシェボ・シンタシュタ文化（Abashevo-Sintashta archaeological community）が広がる。一方で、セイマ・トルビノ青銅器は、同時期の東から西への波として捉えられ、その起源地についてはサヤン・アルタイ山脈付近と言われている（図1）。筆者（松本2011）はこの見解に対し、チェルヌイフらが使ったのとほぼ同様の資料を用いて、必ずしもアルタイを起点とする西漸説が積極的に支持されるわけではないことを示した。以下に分析の骨子を示そう。

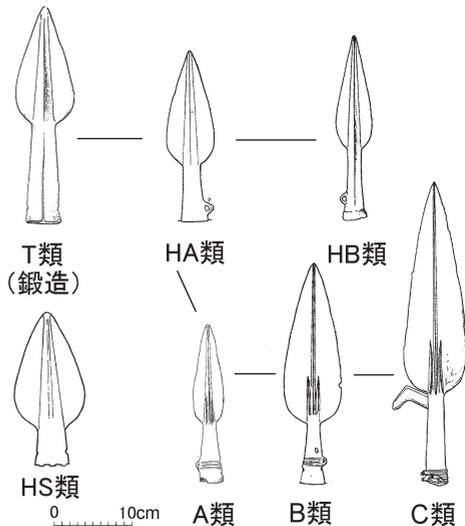


図2 矛の変遷

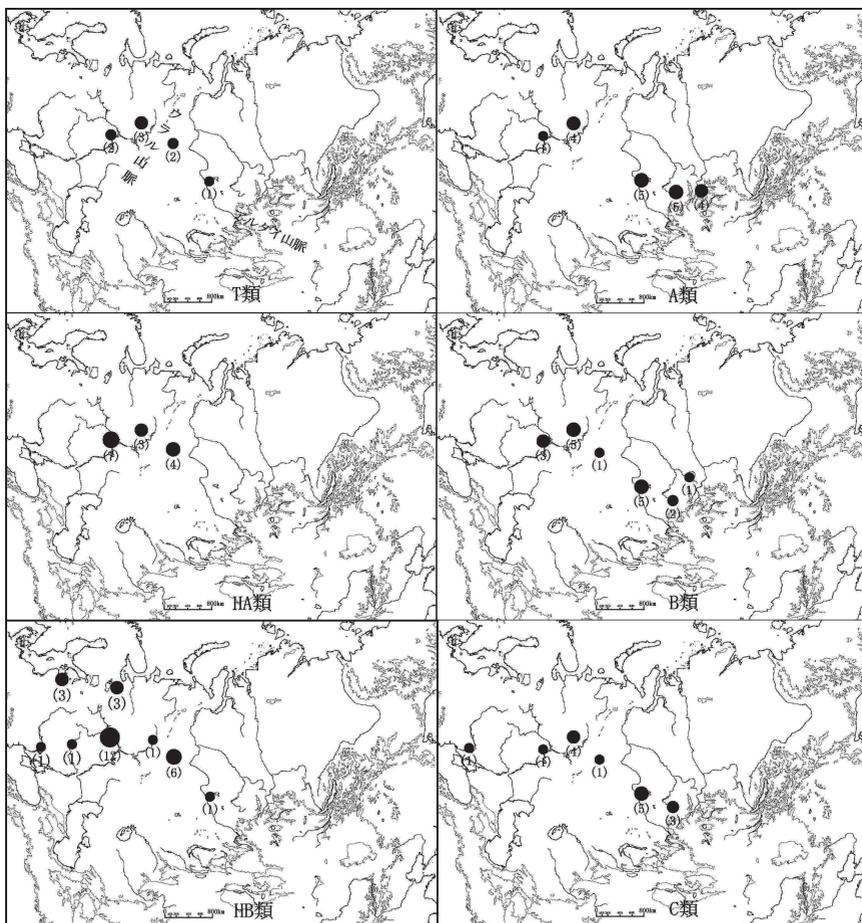


図3 セイマ・トルビノ各型式の分布

セイマ・トルビノ青銅器群のうち、変化が明瞭なのは矛である。矛は図2のように、鍛造品(T類)から鋳造品へ、そして鋳造品ではHA類からHB類へ、あるいはA類から、C類のように変化する。後者は、より大型のものへの変化である。これらの分布を見たところ、より古い型式がアルタイ付近に集中するような傾向は見られなかった。全ての型式が存在するのは、ウラル山脈付近であり、そこを起点とした東西で、型式変化が一定期間共有されていた状況が確

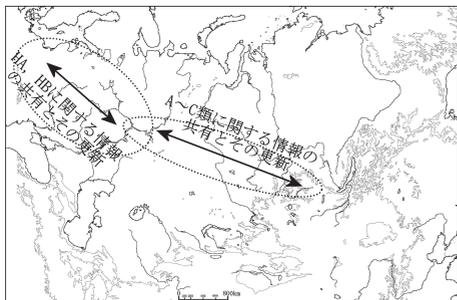


図4 セイマ・トルビノ青銅器の拡散モデル

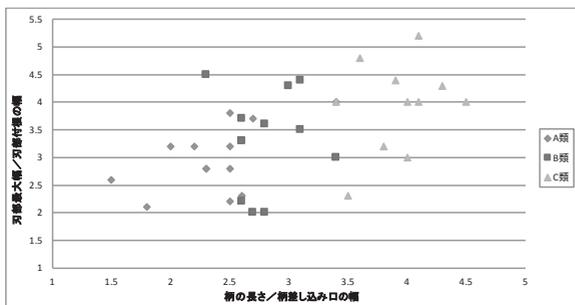


図5 矛A、B、C類の形態比較

認められた (図4)。

また、重要であるのは、型式変化の内容である。図5は大きさによって区分された矛A、B、C類の形態を比較したものである。グラフの縦軸は、刃部最大幅を基部の幅で除した値であり、横軸は柄の長さを柄の最下部の幅で割った値

である。ここから、型式が大型化するにつれて、柄は身に対して細くなる他、柄自体も細長くなる傾向が見て取れる。つまり、刃部が大型化するとともに、それを支える柄が細化するという、武器

としての機能的には矛盾した変化が知られるわけである (松本2011)。従って、セイマ・トルビノ青銅器群の矛の用途やその分布が、次項で示すような戦闘用の武器を保持する集団の動態を、必ずしも示していない可能性がある。むしろ、青銅器分布背景の解明には、その非実用性、用いられたコンテクスト、社会状況を考慮する必要があるといえよう。

3. 前2千年紀前半の草原地帯における社会像

セイマ・トルビノ青銅器群とその集団

ここで、セイマ・トルビノ青銅器群が拡散した背景、そしてその社会状況に関する学史をまとめておこう。チェルヌイフら (Chernykh1992:215, Chernykh, Kuz'minykh, Orlovskata2004: 25-26) は、セイマ・トルビノ青銅器群が、冶金技

術者と戦士（騎馬）を有する小集団が拡散させたものであると考えている。セイマ・トルビノ青銅器の矛などの武器、骨製防具などが含まれる墓は、軍事的性質を持つとされる。これに対してクジミナは、当該段階における騎馬の存在を示すデータはないとし、各地における冶金の発達状況から見ても、常時的戦闘集団というより、定住的であったとする。従って、集団全体の移動には否定的で、金属（錫）、金属器は、冶金技術者自身の移動、あるいは交換によって東から徐々に拡散したとする（Kuz'mina2004: 50-52）。アンソニーは、セイマ・トルビノ青銅器群を有する諸文化が、土器、集落、墓葬儀礼において標準型を持たないことに注目し、一つの文化では捉えられないとする。その冶金技術についても、シベリア森林草原地帯南部のエリート達によって受容されたとし、その背景として、シンタシュタやペトロフカ（同時代の他文化の墓地）のエリート達との競合を示唆している。アンソニーは、チェルヌイフ同様、当該青銅器群がイリテシュ川上中流域、アルタイ山脈西麓に最初に出現し、西へ拡散したとしている。また、本論で扱うロストフカ墓地についても、最も早い段階の墓の一つとして評価している（Anthony2007: 443-448）。このような、各地域における青銅器の受容という考えは、フラチェティによっても指摘されている。フラチェティはセイマ・トルビノ青銅器群拡散の背景として、季節的移動を行う諸集団による相互関係を挙げて、各地域集団の個別的ネットワークによる伝達を示唆する（Frachetti2008: 173-174）。コリャコーバ、エピマクノフは当該青銅器群について、エリート戦士の下、冶金を行う幾つかのクラン集団が北、西方向へ移動しつつ、コロニーを形成していったと考えている。起源地（アルタイ）から遠く離れたコロニーでは、在地の土器や住居を用いていた可能性を挙げている（Koryakova, Epimakov2007: 108-109）。セイマ・トルビノ青銅器群拡散の背景や、青銅器群を有する集団に関して考えられてきたイメージはおおよそ上のようなものである。次に、セイマ・トルビノ青銅器群とは区別されるが、ほぼ同時期（前2千年紀初頭頃）において、当該青銅器群の分布範囲でもあった東南ウラル地域における社会像についての研究に言及しておく。これらはセイマ・トルビノ青銅器群の評価と幾分関わると考えられる。

東南ウラル地域における社会像

前2千年紀初頭の東南ウラル地域では、シントシュタ文化が形成され、要塞化された集落や、金属器、車輻を伴う墓葬が発見されているが、その評価について様々である。アンソニーは、社会、政治的变化における刺激剤としての戦争を重視し、シントシュタ文化における要塞化集落、武器、戦車は、戦争の増加を示していると考える。前3千年紀半ば以後、定住化が進むとともに部族集団の軋轢が増加し、公共儀礼における贈与物獲得のための交易が促進されたという(Anthony2009)。そして、シントシュタ文化における動物、車輻、武器の供犠を階層化の根柢としている(ibid.)。もっとも、アンソニーが戦争の増加の根柢とした戦車(車輻)については、様々な批判があり、荒は現地の資料を検討しつつ、戦車としての利用には慎重な立場をとっている(荒2014)。コールは動物犠牲を伴う墓から、ある程度の社会複雑化を想定し、新進化主義でいう首長制よりも、軍事民主制(military democracy)のある種の形態をより適切な概念として挙げている(Kohl2007)。また、馬具や車輻から、輸送や戦争における進展を示す可能性を説き、ある種の武器が実用品としては小さすぎることは認めつつも、儀礼用具だけでなく、多くの武器が実用であるとする(ibid.)。コールの論では、青銅器の実用化は、本段階以後の後期青銅器時代から鉄器時代への変化において重要である(ibid.: 252-256)。アンソニーやコールのように、青銅器の実用化やその武器としての発達を重視すれば、明確な武器、階層化を伴う初期鉄器時代(いわゆるスキタイ系文化期)へと続くような変化が前2千年紀の初頭から、既に起きていたことになる。

一方で、エピマクノフは、ウラル地域の青銅器時代全体として、かなり複雑化した社会組織を見込むのは難しいとする。当時の人口の小規模性や墓におけるランク区分の欠如は、社会階層化をそれほど示さないとしている(Epimakov2009)。シントシュタの社会における、軍事的エリートの存在は、集落の要塞化、個人的武器などから想定できるが、その後は新たな領域的資源、内的衝突の欠如により、階層区分よりも、水平的(親族的)秩序に沿って社会発展したとする(ibid.:87)。また、コリャコーバとの共著においても、エ

リートの不安定性や共同儀礼に言及しており (Koryakova, Epimakov2007)、エリートと他の社会成員との差はそれほど見積もられていない。ただし、エピマクノフは、セイマ・トルピノ青銅器群を含む段階には、威信的経済だけでなく、経済全体に金属器が関わってくるとしており (ibid.)、この点では上述のコールの論 (Kohl2007) と類似する。なお、エピマクノフは首長制のような一般的な概念で説明するよりも、当該地域独自の社会変化モデルの重要性を説いている (Epimakov2009)。直線的な社会複雑化を想定しない面ではフラチェティも共通する。フラチェティは、当時の移動性牧畜民における組織の非安定性を指摘し、それぞれの社会の戦略によって社会、政治的成長、退行がみられるという (Frachetti2009)。ユーラシア草原地帯においては多様な各集団の経済、社会的利害が共存しており、集団間で社会のある部分についての共有化は生じていても、社会全体を共有することはない、非画一性 (non-uniformity) を特徴として挙げる (ibid.: 21-22)。東南ウラル地域について、シタシュタなどの社会については、中央化、階層化された「首長制的政体 (chiefdom-like polity)」の特徴を示すが、それに隣接する地域における移動牧畜民や冶金技術者としての集団は、そのような中央化した社会とは制度的には区別されるとする (ibid.)。また、シタシュタの組織も数百年で分散化してしまうことから、制度的結合、分散が時期を通じて変動するとしている。ズダノヴィッチらはシタシュタにおける階層化とエリートの存在を示唆するが、要塞集落は全体のシンボルであり、階層は隠されていること、墓に富の集中は見られないことから、エリートの経済的権力は弱かったとする (Zdanovich, Zdanovich2002)。一方で、このような階層化の進展は、シタシュタだけでなく、ユーラシア草原地帯全体の新たな段階であると考えている (ibid.)。

以上のように、戦士やエリートの出現は、セイマ・トルピノ青銅器群に限らず、前2千年紀のユーラシア草原地帯の少なくとも一部の地域において、しばしば行われる解釈である。しかしながらエリートの安定性、階層性の程度に関しては、多様な見解が存在しており、金属器の実用化もその評価に幾分関わっているといえる。

4. 問題の所在

前2千年紀初頭の草原地帯各地では、戦士やエリートの出現が指摘されているものの、その性質についての見解は多様であった。この時期の草原地帯の一部では、青銅利器、車輛、要塞集落が確認されるものの、それらの解釈によって導かれる集団、社会像が異なってくるのである。草原地帯の歴史を考えた場合重要であるのは、前1千年紀初頭の初期鉄器時代への変化に向けて、青銅器時代をどのように評価できるのかということである。前1千年紀以降には、スキタイ系文化が広く成立し、騎馬遊牧に加え、武器、大型墳丘が顕著になってくる。鉄器は認められないものの、既にそのような時代に近い社会像を想定するのか、あるいは鉄器時代との差異を強調するかで、当該段階（青銅器時代）の評価は大きく変わることになる。この問題について考える際、先学では青銅器そのものの分析が不足している。例えば、青銅器の実用化の議論に関して、青銅器やそのコンテキストから詳細な検討が行われているわけではない。また、2. で示したように、戦士集団やその移動という解釈は、少なくとも青銅器自体の変化からは再考が促されるものである。

他の問題として、戦士集団の移動あるいは交流の存在を指摘する以外では、青銅器分布の背景についての具体的な説明が与えられていないことが挙げられる。戦士集団の移動モデルを除くと、一定の地域における社会複雑化と、それを越える広域的動態が、必ずしも整合的に説明されているわけではないのである。これは、セイマ・トルビノ青銅器群に限らず、移動、交流が歴史的解釈として多用されてきた草原地帯において、しばしば見られる問題である。例えば、前1千年紀のスキタイ期における物質文化の広汎な分布、類似は、騎馬遊牧による移動、交流の増加と捉えるのが一般である（松本2016）。とすれば、それと、セイマ・トルビノ青銅器群における移動、交流というのは、質的にどのような差異があるのだろうか。一方は「騎馬遊牧民」で、一方は「戦士」という担い手の差異だけなのだろうか。草原地帯の歴史を、交流の担い手の変化あるいは、その起源地、影響の方向だけで評価することは出来ないであろう

(松本2015)。この問題についても、近年明らかになってきた各地の社会動態を考慮した上で、考古学的に議論を深める必要がある。

5. 方法と資料

上の問題は、分布の背景である移動や交流というものの説明を、当該段階だけで完結させるのではなく、異なる時期とも比較可能な形で評価していく必要性を示している。本稿では青銅器の検討から、この問題の一部解決を試みるものである。まずは、青銅器の特に出土状況から、その社会的性質を明らかにしたい。資料としては、セイマ・トルビノ青銅器群の遺跡の中では比較的詳細な報告がなされているロストフカ墓地(Матюшенко, Синицына1988)を用いる。

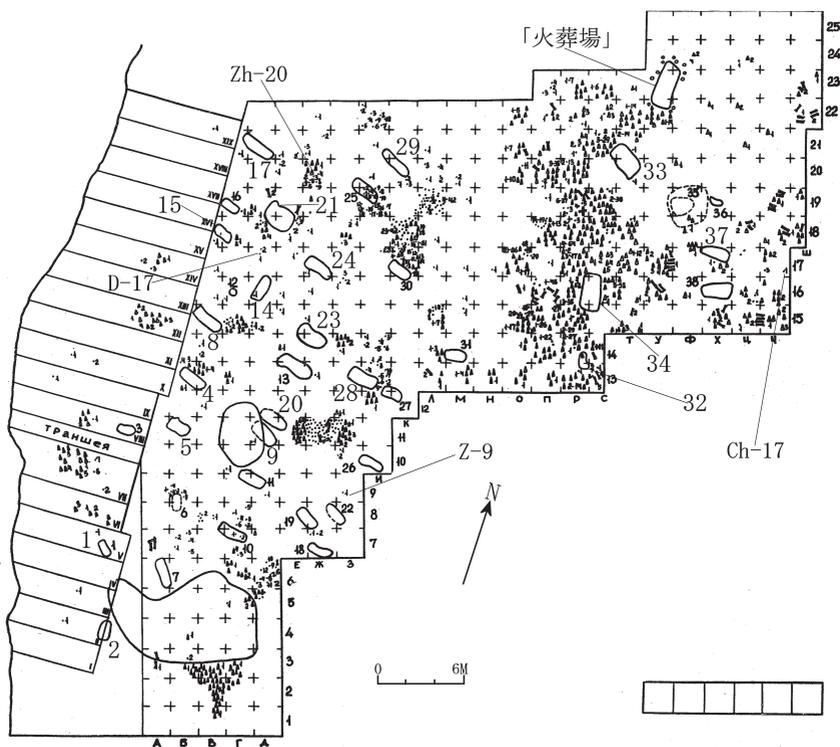


図6 ロストフカ墓地全体図

具体的には、墓地における各種青銅器の扱われ方について検討し、青銅器自体の複雑性との相関関係をみる。そして、青銅器と被葬者、とくにその階層性との関係も検討する。墓地には階層差が表れやすく、異なる時期、地域ではあるが、分析例があり（渡辺1992、宮本2000、村野2005）、それらの成果を参照しつつ分析をすすめる。特に、労働投下量を示す墓壇面積と、青銅器を中心とする副葬品点数の相関を確認し、階層化パターンの有無と、その中での青銅器の有り方に注意する。

さらに、前稿（松本2011）で明らかにした青銅器の分布状況を併せ、青銅器分布の背景に迫りたい。その上で、草原地帯における他の時期の状況と比較し、当該期の特徴を明確化することを目指すことにする。

5. ロストフカ墓地の分析

セイマ・トルビノ青銅器群の纏まった報告は少なく、出土状況まで明確に示されているものは少ない。本論で検討するロストフカ墓地は、当時の草原地帯東部の様相を知る重要な手がかりである。ロストフカ遺跡は、オムスクから東に15km、イルテシュ川支流のオミ川左岸に存在し、1966年から1969年にかけて発掘調査が行われた（Матющенко, Сеницына1988）。ロストフカ遺跡は38基の墓と、それら周辺の遺物散布から形成される。報告（*ibid.*）によれば、遺物散布が墓地形成時よりも先行することはない。墓地上面に散布する遺物群のうち、土器については早、晩2グループに区分でき、墓の全てと一部の表面散布は、早い時期に属するといわれる。本論で扱うのはこれらの早い方のグループである。墓同士の切り合いはなく、出土した矛は殆どがC類（松本2011）であり、38基の墓が継続的に形成された可能性が高い。墓地では、土壇墓が列状に形成され、報告では5列確認できるという。しかし、それらは明確に判別できるわけではなく、列から外れるものや、土坑の方位が特異なものも存在する。また、発掘区より東南側は明らかになっておらず、列が続く可能性も指摘されている。

なお、ロストフカ墓地がセイマ・トルビノ青銅器群を持つ一般的な墓地とい

えるかどうかについては今後、検討を要する。また、ロストフカ墓地が、ある社会集団の特定層のみを反映したものである可能性も排除できないが、これについても、現状の資料での解決は難しく、今後の課題とせざるを得ない。

副葬品とその出土状況

ロストフカ墓地における出土状況について、報告書に基づいて、主に青銅器が出土した墓について、それらの中で青銅器がどのように扱われていたのかに注目しつつ記述する。青銅器以外に、多くの土器、石器が出土しているが、殆どが断片である。概して遺体の残存状況はよくない。人骨に焼けた痕跡があり、土坑内からは炭、焼土が発見される例が多く、発見された遺体が当時の状況をそのまま反映しているとは限らない。報告書では、遺体の乱れの要因として、墓壙埋葬に先立ち、遺体解体あるいは焼却が行われていた可能性を考えている (ibid.: 64-65)。なお、チェルヌイフらは、遺体の脚部についてのみ攪乱されていない例から考えて、この考えを支持していない。副葬の金属器に手が付けられていないことには留意しつつも、敵が遺体に危害を加える意図があったとする (Черных, Кузьминых 1989: 21)。セイマ・トルビノ青銅器群における戦闘的性格を考慮し、チェルヌイフらと同様の見解を持つ論もある (邵、楊 2011: 81-82)。墓

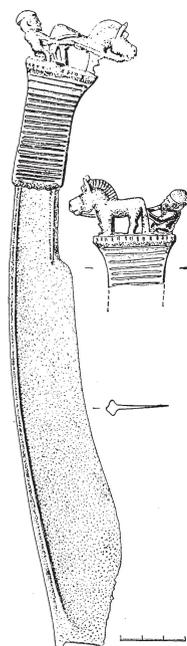


図7 2号墓出土の刀子

周辺の遺物散布のうち、特定の墓に距離的に近いものは、その墓に属するものとして、報告書には記載されている。それらについては、以下でも各墓の項目に記すことにするが、出土場所が墓壙内ではないことには注意しておく必要がある。なお大部分の墓壙の長軸はおよそ東西方向であるが、偏差が大きいものや方向が異なるものも存在する。番号は墓地のおおよそ南西から北東の順にふられており (図6)、図6において、以下に述べた墓については傍らに大きい

番号を記している。

1号墓（性別不明：子供）：有蓋斧（刃は西向き）と石鏃が並んで発見。これらは、遺体頭部とはおよそ逆方向に位置するが、遺体との詳細な位置関係は不明。本墓は長軸が北北西-南南東方向である。

2号墓（性別不明：9-10歳）：青銅製の小型装飾品、水晶片などの装飾品、石刃が墓壙内から発見。この他、有柄刀子が遺体の頭下から発見された（図7）。墓の除去後に発見となっているので、遺体に密着してはいなかったかもしれない。この有柄刀子の柄頭には人物と動物像が鑄出されており、チェルヌイフらは蠟型による鑄造を示唆する。セイマ・トルピノ青銅器群の中でも特殊な製品である。本墓は長軸が南北方向である。

3号墓（性別年齢不明）：骨製の防具のみ

1～3号墓の周辺では、土器、石器等が散布するが、特定の墓に明確に帰属するわけではない。表土近くで矛が見つかったが、位置は不明である。

4号墓（性別年齢不明）：墓坑内は2面に分層。いずれも土器、石器のほか、骨柄銅刃の刀子、鑄型片や馬の顎骨が上面から出土している。遺体との詳細な位置関係は不明である。4号墓に付属するとされる周辺散布では、土器、石器が確認された。

5号墓（男：25歳）：石鏃、碧玉片が遺体頭部付近にあたる場所から発見。遺体傍で矛も発見されたが、本来は、床から10～12cm上の北壁上に突き刺さっていたらしい（図8）。

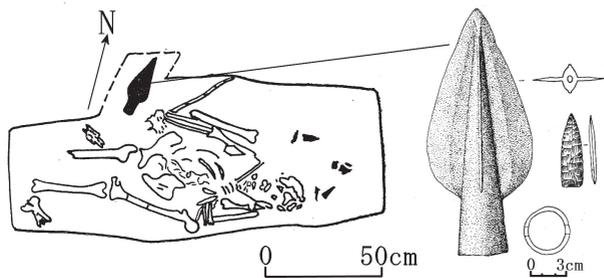


図8 ロストフカ墓地5号墓

8号墓（①子供、
②男：成人、③
男：年齢不明、④
女：40-45歳）②
には、石鏃、石刃、
銅錐、銅刀子（無
柄両刃）が伴う。
③には、骨製刀子

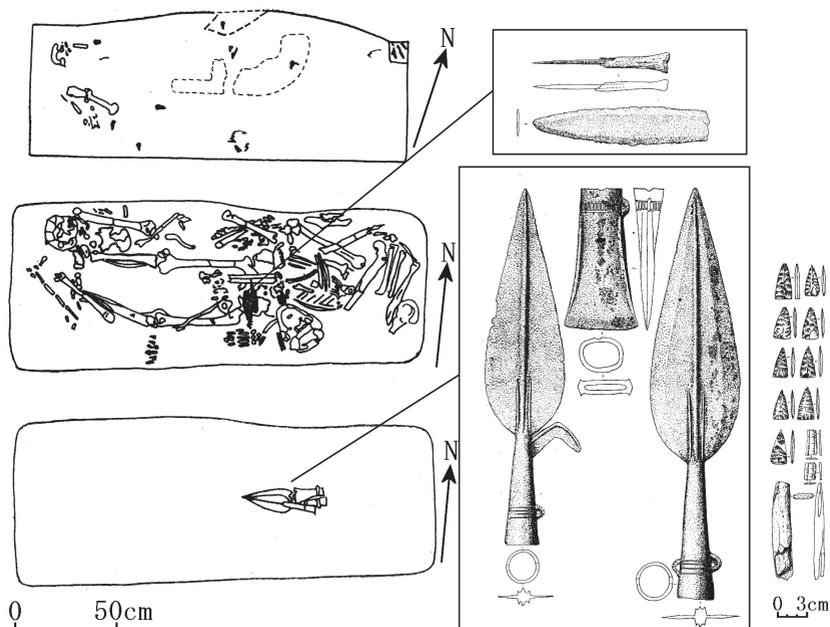


図9 ロストフカ墓地8号墓

柄が伴う。全ての骨を検出した後、墓底の東に混合土を示す点が検出され、それは墓底から15cm掘り下げられており、その下から矛C類2件、有蓋斧1件が発見され、刃は全て西向きであった。附属する周辺散布では、矛C類が地面に突き刺さって発見された他、石器、土器が確認された(図9)。

9号墓(男:年齢不明):墓坑内から銅錐、石鏃。9、20、26号墓周辺の遺物散布では土器、骨器、石器が確認された。

14号墓(女:25-30歳):墓壙内から石器、銅刀子(無柄両刃)が発見。周辺散布には土器、石器が含まれる。本墓は長軸が南北方向である。

15号墓(性別年齢不明):遺体には、石製、青銅製小型装飾品が伴う。周辺散布には土器、石器が含まれる。

17号墓(男:35-40歳):墓壙内から石鏃、石器が出土。周辺散布には石鏃、石器、有蓋斧が含まれる。

20号墓（男：年齢不明）：墓壙内から未成品含む石器の他、墓壙中央部から銅刃骨柄刀子が出土。

21号墓（2遺体：性別年齢不明）：墓壙より東に鋳型（複数）、石刃の散布。墓壙内から石鏃、金環が出土。附属する周辺散布として、有蓋斧（2点：刃は下向き）、金環、土器、石器がある。

23号墓（男：30-40歳）：墓壙内より、石器、銅刀子（無柄両刃）が出土。

24号墓（女：40歳）：墓坑内より鋳型片、石鏃、銅刀子（両刃）、鏝が出土。周辺散布として、矛（2点）、有蓋斧、石器（以上は重なり合って発見。刃は下向き）、石器がある。

28号墓（男：30-35歳）：人骨のみ。27、28号墓共通の周辺散布として、石器、銅針、土器がある。

29号墓（男：年齢不明）：墓壙内から石器、遺体骨盤上から有柄刀子が出土。周辺散布として石器がある。

32号墓（子供）：墓壙内中央部から玉製装飾品、金環が出土。本墓は長軸が南北方向である。

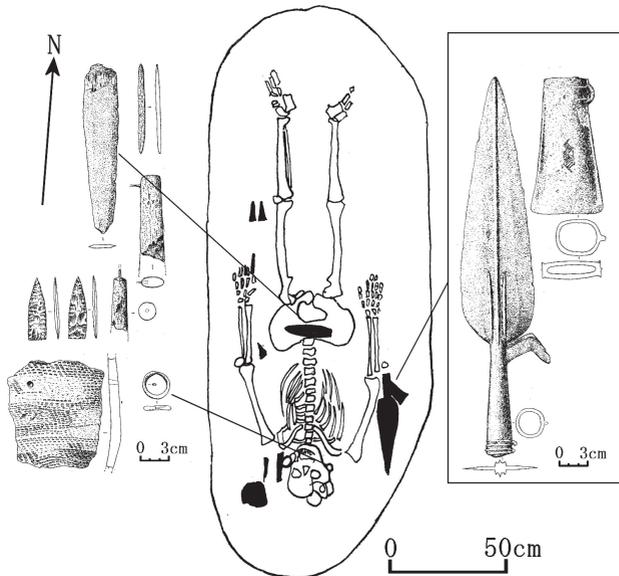


図10 ロストフカ墓地34号墓

33号墓（女性：20-25歳）：墓壙より東南30cmの場所に矛が突き刺してあった。墓壙内東南側を中心に大量の骨板（防具）、金環（2点）、墓壙南角に石器（砥石）が見られた。埋土から骨製針片（同一個体片が防

具と一緒に発見)、石鏃、骨製刀子柄が
発見。周辺散布には、石器、土器、動
物骨が含まれる。本墓は長軸が南東東-
北西西方向である。

34号墓(男性:25-30歳):墓の上面
で土器、石鏃、石器が発見された。遺
体右腕の傍らに、矛(C類)、その下に
有蓋斧(刃は東壁向き)が置かれ、頭
骨こめかみ部で金環(2点)、骨盤上で両刃刀子が出土した。その近くに石鏃
が、左膝近くにも石鏃(2点)があった。また、左手近くに骨製針、頭骨左側
に骨柄を伴う銅針(2点)、土器片があった。周辺散布として、石鏃、石器、
土器がある(図10)。

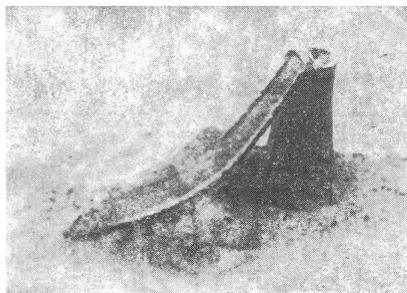


図11 D-17出土状況

37号墓(性別年齢不明):青銅製装飾品、石鏃、土器、両刃刀子が人骨の近
くで発見された。

以上の墓葬の他、発掘区の北東部に「火葬場」とされる遺構がある。これは
地山の上に焼土、焼骨の痕跡(120×300cm)を伴うもので、周囲に4-8cm(深
さ60cm)の小孔が並んでいる。小孔は建物の柱穴と推測されている。

次に、特定の墓に伴わない周辺散布で青銅器を含むものについて記述する。
Zh-20のような番号は発掘区のグリッド番号によるものである。青銅器以外で
は、墓地全体に、土器、石器、骨器の散布が認められるが、青銅器が地山に
突き刺さっているのをのぞいて、遺物は地山より上の黒土層で発見されるとい
う。

Zh-20:土器(3-5個体分)、石器、石鏃、石范(斧)、矛(C類、HS類)、斧、
鏝(2点)が纏まって発見された。利器の刃部は下向きであった。

D-17:有蓋斧、有柄刀子は、刃を下にして纏まって発見された(図11)。

Z-9:刀子(詳細不明)が単体で発見。

Ch-17:刀子片が出土

墓地における青銅器

以上を踏まえ、本墓地において出土状況ごとにどのような遺物が見られるかを整理したものが、表1である。破片資料を含んでいることを勘案し、表の数値は遺物数でなく、墓数で示している。ある器物が複数個体、同一墓から発見されても、1とカウントした。出土状況と遺物の対比から、大まかに3つのグループに区分できると考えられる。まず、墓壙内で主に出土する器物群（ α 群）には、金製品の環、青銅、石製の装飾品、防具、青銅製有茎刀子が含まれる。これらは、おおよそ遺体に近いところで発見されたものである。装飾品が頭位置に相当する場所から発見された例の他、有茎刀子については骨盤近くからの出土が複数知られる。防具を除くと、これらは概して小さいものであり、属人器としての性質が強かった可能性がある。次に、墓壙内以外で主に出土する器物群（ β 群）には、青銅器の有鋸斧、矛が含まれる。これらの多くは出土状況において、刃の方向をそろえる、あるいは、壁、地面に突き刺すといった一貫したパターンが存在する。従って、これらは個々の偶発的な行為の結果というよりは、これらに関わる行為そのものについて、この墓地に関わる集団全体に共有された何らかの規範があったことを示す可能性が高い。なお、このような、矛を地面に突き刺す状況は、トルピノ墓地でも確認されるという（Черных, Кузьминых 1989: 19）。他の墓地における出土状況の詳細な検討が必要であるが、上記の規範についても、かなり広範囲である程度共有されていた可能

表1 ロストフカ墓地における出土状況と遺物の相関

	金製	青銅器					
	環	装飾品	有鋸斧	矛	有柄刀子	有茎刀子	その他
墓壙内	4	3	2	1	1	9	4
墓壙内（特殊な位置）			1	2	1		
表面散布	1(1)		6 (4)	4(3)	1	2	2
	土器	石/玉器				骨器	
	土器	石鏃	装飾品	鋳型	その他	骨器	鏝
墓壙内	8	15	4	2	15	4	3
墓壙内（特殊な位置）							
表面散布	◎(10)	◎(4)		2(1)	◎(16)	◎(2)	

() は特定の墓に近い表面散布、◎は多数を示す

性がある。周辺散布が特定の墓に関連する可能性があるものも一定程度存在するが、そうでないものも存在する。墓壙内、外いずれからも発見される遺物として、多数の土器、石器、骨器などが挙げられるが、青銅器では有柄刀子がある。これは、有鋏斧とともに、刃をそろえた状態で発見されているし、29号墓のように有茎刀子と同様、被葬者の骨盤上から発見された例もある。骨盤上の発見は、 α 群の有茎刀子と同様の扱いである。一方、墓壙下から発見された例があり、この刀子は先述した、柄頭に人物像を鋳出すもので、セイマ・トルビノ青銅器群の中では特異で複雑なものである。このように、有柄刀子の扱いは多様であるが、厚葬の33、34号墓においても、被葬者近くには α 群の有茎刀子が置かれ、有柄刀子や有鋏斧、矛などと置き換わっていないことから考えると、有柄刀子は β 群に入ると考えられる。以上のように、 α 群には、有茎刀子や装飾品など、比較的単純な作りの青銅器が含まれる。一方で β 群に含まれるのは、蠟型を用いた可能性が指摘されている有柄刀子、内范を必要とし、紋様を持つ、あるいは大型である有鋏斧や矛といった、セイマ・トルビノ青銅器群の中でもやや手の込んだものに限定されているのである。つまり、青銅器自体の複雑性が、単なる形態、機能差のみならず、墓地での葬送行為における取り扱われ方の2つのカテゴリーとして認識できるわけである。

墓地における階層性と青銅器

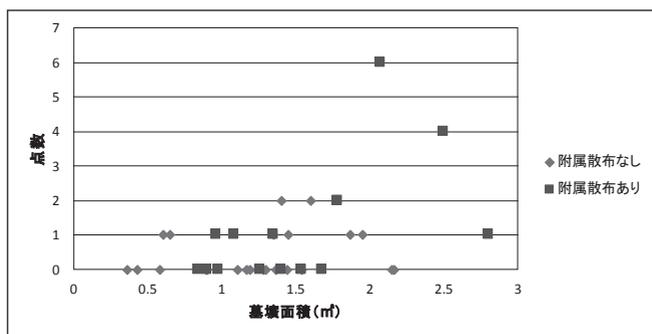


図12 α 群青銅器の点数、墓壙面積、附属散布の有無の相関

本墓地の土壙墓には複数埋葬が確認され、各墓壙とそこから発見される遺物が、複数の被葬者のうち誰に対して、またそもそも特定の一人

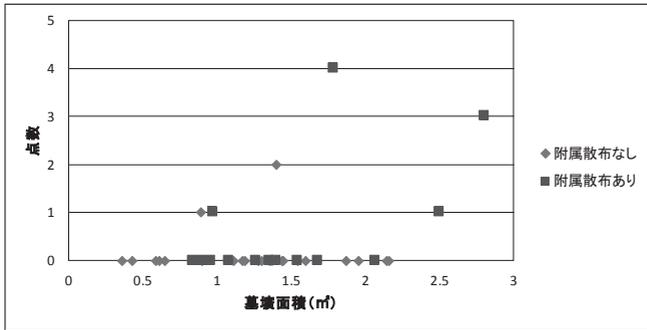


図13 β 群青銅器の点数、墓壇面積、附属散布の有無の相関

に対して行われた行為の結果であるかどうかについても不明の点が多い。この点は非常に重要ではあるが、本墓地の遺体は焼かれるなど損傷

が激しいものも多く、正確な埋葬人数、順序の復元は困難であるので、以下では一つの墓壇を何らかの単位と考え、その単位間での階層差を見ていくことにする。

まず、 α 群を中心とする、被葬者に比較的近いところの副葬品について考えたい。前節で設定した各群は完全に排他的ではないので、幾つかの資料は各々考える必要がある。ここでの分析は被葬者近くへの副葬されているものに重点を置くので、29号墓の有柄刀子、34号墓の矛、有蓋斧は α 群に含めて考える。 α 群のうち青銅器（有茎刀子、錐・鏝片、装飾品）、金環、防具の点数¹を数え、墓壇面積および附属する遺物散布の有無との相関をみた（図12）。結果、 α 群を4点以上もつ2基は、2m²を超え、いずれも遺物散布を持つことが認められるが、それ以外は要素間の強い相関は認められない。

次に、 β 群について検討する。これについても、出土状況から考えて、21号墓の墓壇外出土の金環を含め、先ほど検討した29、34号墓の青銅器は含めず、墓壇面積との相関をみた（図13）。結果、最大面積の21号墓は β 群3点を持ち、遺物散布を伴うが、それ以外については各要素の相関は高くない。つまり、 β 群を多く持つものが、必ずしも墓壇面積が大きいとは限ら

表2 α 群、 β 群点数の相関
 β 群点数

	0	1	2	3	4
0	21	2			
1	9			1	
2	2				1
3					
4					
5					
6	1				

ない。また、 β 群が多かった8、21号墓はいずれも、合葬墓である。両墓は比較的近くにならんでおり、21号墓の北側にもZh-20があることは興味深い。とはいえ、本墓地の人骨の残存状況は良好ではなく、これ以外にも合葬墓が存在した可能性があることも含めると、墓地全体の傾向とまで言えるかどうかは不明である。さらに、各墓における α 群、 β 群の点数についても、正の相関は見られない(表2)。

総じて、墓地全体の傾向からいうと、墓壇面積、 α 群、 β 群間に相関は見られない。遺物散布については、やや大きい面積のものに偏る傾向が見られるが、どの墓にも属さない散布も知られることも考え合わせると、それほど大きく評価できない。つまり、21、33、34号墓の扱いは墓地全体から言えば特殊であり、これらの背景として何らかの階層性が働いていたとしても、それは偶発的で、墓地における全体的規制とはなっていないことが伺われる。

7. 考察

各種青銅器の性質

上記分析を整理すると、以下の事項が確認できた。

- ①：各種青銅器の複雑性は、墓地のコンテキストにおける差異と対応する
- ②：各種青銅器が階層性と結びつくパターンは未形成

ここでまず注目したいのは、①である。内范の使用や、特殊な製作技法を用いるといった青銅器製作における相対的な複雑性は、柄をつける為の蓋部を作り出すような青銅器の機能とも関わってくるが、葬送行為における区分とも対応している。つまり、葬送行為における青銅器の2つのカテゴリー区分(α 群、 β 群)は、青銅器の製作段階から、各種器物にどの程度の複雑性を与えるかという面で意識されていた可能性がある。

それでは、各カテゴリーの性質とはどのようなものであろうか。まず、 α 群の青銅器は遺体の近くに置かれ、形態が比較的単純な道具や装具である。また、墓地における階層性とは結びつかない。これらは日常の道具、装具として使用された後、被葬者に副葬されたものと考えられる。 α 群の青銅器は、セイ

マ・トルビノ青銅器群の分布域の中である程度類似した形態を持っているが、それらは単純であり、青銅器製作においてどの程度情報の共有が行われていたかを知ることは難しい。

β 群は比較的複雑な形態を持つ青銅器から成り、最終的に埋められる場合、一定方向に突き刺すという規範を持つ。また α 群同様、墓地の階層性との結びつきが弱い上、 α 群に比べ、特定の個人あるいは墓壇単位への帰属が曖昧になる傾向にある。 β 群には矛が含まれており、これが地面や壁などに突き刺さっている出土状況から考えて、 β 群に「武威」などの戦闘に関わる意識が内包されていた可能性がある。しかしながら、矛は大型化しており、実用利器としての機能を失う傾向にあった。さらに、本来的には工具である有蓋斧と、矛と一緒に発見されている点から考えると、実際の戦闘よりも、それらが持つ、武器以外の何らかの意味の方が重要であった可能性がある。チェルヌイフらの言うような、ロストフカ墓地が敵の略奪、攪乱を受けていたかどうかの判断は難しい。しかしながら、略奪説を採る場合、遺体の損失部が必ずしも一定していないことや、周辺散布の顕著な8号墓、34号墓に比較的保存の良い遺体が存在することへの説明が必要のように思われる。少なくとも特定の「戦士」による β 群青銅器の独占は起きておらず、むしろ β 群は墓地全体での共同、共有的様相を見せるものである。

セイマ・トルビノ青銅器群分布の背景

併せて前稿（松本2011）における検討から判明した以下の事象から、青銅器分布の背景を考えよう。

- ③：一定の期間にわたって、青銅器製作の情報は広範囲において共有
- ④：矛については大型化、非実用化の傾向がある

前頁における α 、 β 郡のような青銅器のカテゴリー区分がセイマ・トルビノ青銅器群を有する他の墓地でも行われていたと想定して論を進めると、セイマ・トルビノ青銅器の分布は、エリート間の交流よりむしろ、青銅器を使用した葬送行為に関わる情報の共有を示す可能性がある。また、その情報は、鑄造

時の複雑性という形で、青銅器製作にも影響を及ぼしていたと考えられる。それでは、このような広範囲における葬送行為、あるいはそれに関わる器物の共有化にはどのような背景があるのだろうか。ここで注目したいのは、葬送行為に、当時の貴重品である青銅器の中でも複雑なものを利用するなど、かなりの価値を割いており、それらが特定の個人や集団に集中する傾向が見られないことである。従って、ここでの葬送行為は階層秩序を強化する手段ではない。また、広域での情報共有化の動機として、交易での物品、資源入手、あるいはアンソニーのいうような社会集団間の競合など、実利的なことも考えられるが、その場合、あえて労力を割き、情報共有化を社会全体で再確認する必要はない。そこで一つの説として、葬送行為とそれに伴う青銅器を、社会的結合の確認指標として利用した可能性を提示したい。つまり、広域で情報を共有すること、それ自体が目的で、その為にβ群の青銅器を用いたと考えるのである。逆に言えば、労力と規範を伴う物質を媒介とする必要があるほど、実態としての社会的結合は弱く、つながりを維持しようとする意思が破られるような事態になれば、青銅器も共に衰退する運命にあったと考えられる。このことは、セイマ・トルビノ青銅器群が突然終焉を迎えることとも関係していよう。さらに、ロストフカ墓地の有柄刀子に見られた動物、人物像を形成した複雑な技法もセイマ・トルビノ青銅器群以降には受け継がれない。このような特殊技術の非継承性は、それが、青銅器自体の実利面というより、当事集団特有の目的（葬送行為、社会的結合の媒介物）に供されていたことを示すものと考えられる。

草原地帯における青銅器時代

以上のような青銅器のあり方は、ユーラシア草原地帯の青銅器時代では従来想定されてこなかったものである。上で言及したように、コール (Kohl2007) やエピマクノフ (Epimakov2009) は青銅器の実用化に注目し、特にコールは鉄器時代への変化を考える際、それを重視している。地域は異なるが、社会の特に実用に寄与する部分における金属器使用の程度によって、青銅器、鉄器時代を区分することでは、チャイルドによるもの (Childe1944) が有名である。

確かにセイマ・トルビノ青銅器群においては、 α 群のように、実用に供される青銅器が出現し、それらは階層とはかかわらず、属人的性質を帯びるほど多く供給されていたことが知られる。しかしながら、当該社会が最も労力をかけ、価値づけていたのは、 β 群青銅器によって示される葬送行為や社会的結合だったのである。ここに、セイマ・トルビノ青銅器群の特徴があると考えられる。

草原地帯において、セイマ・トルビノ青銅器群に類似する青銅器のあり方を示すのが、モンゴリア青銅器様式（前2千年紀後半）である。当該様式は、セイマ・トルビノ青銅器群が終焉した後、サヤン、アルタイ山脈の東南側にあたるモンゴリアを中心として分布する。ここでも青銅器は実用品として大量に生産されていたが、それらとは明瞭に区別され、社会的に最も価値づけられていたのは青銅製精製品であった。モンゴリア青銅器様式においても精製品は、モンゴリアにおけるゆるやかな結合の媒介物であった可能性が高い。そして、一定期間存続した後に終焉を迎えること、精製品における特殊技法がその後受け継がれないことも、セイマ・トルビノ青銅器群と共通している。セイマ・トルビノ青銅器群やモンゴリア青銅器様式に見られるような、青銅器を実用品として使いつつ、一方で、それが階層性とは深くかかわらず、広い地域を緩やかに結びつけるコミュニケーションの道具として精製青銅器を用いることは、草原地帯における前2千年紀、すなわち青銅器時代の一つの特徴とすることが出来る。なお、それが大きく崩れるのは、前2千年紀終末である。モンゴリアからサヤン山脈を越えて北に位置するミヌシンスク盆地で生まれた、後期カラスク青銅器様式は、カテゴリーとしての精製品を欠き、代わりに青銅器の機能分化が著しくなる。ここにおいて青銅器は、コミュニケーションの媒介物としての役割を終え、実用あるいは奢侈品に特化し、この傾向は鉄器時代（スキタイ期）に引き継がれるのである（松本2015）。

青銅器時代を広範な地域が結合していく時期として評価することは、西ヨーロッパにおいても行われており、豊富な鉄資源によって各地域が分散化する鉄器時代とは区別されている（Kristiansen1998）。一方で、西ヨーロッパの青銅器時代では、リーダーによる支配拡大の契機として青銅器が重視されてい

る (Earle1997)。ユーラシア草原地帯では、青銅器は実用の利器、あるいは支配の道具として現れる以前に、広域におけるコミュニケーションの道具であった。草原地帯の歴史において、移動や交流によって示される広域動態は、各地の社会動態と同様に重要である。しかしながらそれは、単にどの集団が、どこからどこに行き、そしてユーラシア東西に影響を与えた、という意味の上だけではない。交流そのものの性質をみることによって、世界史において、草原地帯が特徴的かつ、独自に歴史過程を歩んでいることを見出すことが出来るのである。

注

注1 石製の装飾品については、小さいビーズ等の詳細な出土状況が判らないものが多く、数値からは除外している。

図版出典（筆者作成を除く）

図2 Черных, Кузьминых 1989より引用、改変

図6～11 Матющенко, Синицына 1988より引用、加筆

参考文献

- 荒友里子2014「南ウラル、カザフスタン中・北部における前2千年紀初頭のスポーク式二輪車輻について」『ユーラシアの考古学』pp.225-235,六一書房
- 邵会秋、楊建華2011「塞伊瑪—図爾賓諾遺存与空首斧的伝布」『边疆考古研究』10, pp.73-92, 科学出版社
- 松本圭太2011「中国初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群」『中国考古学』11, pp.133-153
- 松本圭太2012「モンゴリアにおける青銅器様式の展開」『中国考古学』12, pp.111-134
- 松本圭太2015「ユーラシア草原地帯における青銅器様式とその境界」『中国考古学』15, pp.101-126
- 松本圭太2016「初期遊牧民文化」動物紋出現の意義」『中国考古学』16, pp.151-174
- 宮本一夫2000「オルドス青銅器文化の終焉」『中国古代北疆史の考古学的研究』pp.267-299, 中国書店
- 宮本一夫編2008『長城地帯青銅器文化の研究』（シルクロード学研究Vol.29）シルクロード学研究センター
- 村野正景2005「中国周代における青銅鼎の動態とその背景—湖南湘江地域を中心に—」『古文化談叢』53, pp.141-192

- 渡辺芳郎 1992 「大汶口遺跡墓制考－階層の変異を中心として－」『史淵』 129, pp.1-46
- Anthony, D. W. 2007 *The Horse, the Wheel, and Language: How Bronze-Age Riders from the Eurasian Steppes Shaped the Modern World*. Princeton University Press.
- Anthony, D. W. 2009 The Sintashta Genesis: The Roles of Climate Change, Warfare, and Long-Distance Trade. In *Social complexity in prehistoric Eurasia: monuments metals, and mobility*, ed. B. K. Hanks and K. M. Linduff, pp.47-73, Cambridge University Press.
- Chernykh, E. N. 1992 *Ancient metallurgy in the USSR*. Cambridge University Press.
- Chernykh, E. N. 2009a Ancient metallurgy in the Eurasian steppes and China: problems of interactions. In *Metallurgy and civilisation: Eurasia and Beyond*, ed. J. Mei and T. Rehren, pp.3-8. Archetype Books.
- Chernykh, E. N. 2009b Formation of the Eurasian Steppe Belt Cultures. In *Social complexity in prehistoric Eurasia: monuments metals, and mobility*, ed. B. K. Hanks and K. M. Linduff, pp.115-145, Cambridge University Press.
- Chernykh, E. N., Kuz'minykh, E. V., Orlovskata, L.B. 2004 Ancient Metallurgy of Northeast Asia: From the Urals to the Saiano-Altai. In *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river*, ed. K. M. Linduff, pp.15-36, The Edwin Mellen Press.
- Childe, V. G. 1944 Archaeological Ages as Technological Stages. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*. Vol. 74, No. 1/2, pp. 7-24.
- Earle, T. 1997 *How Chiefs Come to Power*. Stanford University Press.
- Epimakov, A. V. 2009 Settlements and Cemeteries of the Bronze Age of the Urals: The Potential for Reconstructing Early Social Dynamics. In *Social complexity in prehistoric Eurasia: monuments metals, and mobility*, ed. B. K. Hanks and K. M. Linduff, pp.74-90, Cambridge University Press.
- Frachetti, M. D. 2008 *Pastoralist Landscapes and Social Interaction in Bronze Age Eurasia*. University of California Press.
- Frachetti, M. D. 2009 Differentiated Landscapes and Non-Uniform Complexity among Bronze Age Societies of the Eurasian Steppe. In *Social complexity in prehistoric Eurasia: monuments metals, and mobility*, ed. B. K. Hanks and K. M. Linduff, pp.19-46, Cambridge University Press.
- Kohl, P. L. 2007 *The Making of Bronze Age Eurasia*. Cambridge University Press.
- Koryakova, L. and Epimakhov, A. 2007 *The Urals and Western Siberia in the bronze and iron ages*. Cambridge University Press.
- Kristiansen, K. 1998 *Europe before History*. Cambridge University Press.
- Kuzmina, E. E. 2004 Historical Perspectives on the Andronovo and early metal use in Eastern Asia. In *Metallurgy in ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow river*, ed. K. M. Linduff, pp.15-36, The Edwin Mellen Press.
- Parker-Pearson, M. 1982. Mortuary Practices, Society and Ideology: an ethnoarchaeological study. In *Symbolic and Structural Archaeology Cambridge*, ed. I. Hodder, pp. 99-114, Cambridge University Press.
- Zdanovich, G. B. and D. G. Zdanovich 2002 The 'Country of Towns' of the Southern Trans

- Urals. In *Ancient Interactions: East and West in Eurasia*, ed. K. Boyle, C. Renfrew, and M. Levine, pp. 249-264. McDonald Institute for Archaeological Research.
- Кузьминых, С. В. 2011 Сейминско-турбинская проблема: новые материалы. *Краткие сообщения Института археологии*. Вып. 225. С. 240–263.
- Леонтьев, С. Н. 2007 “Клад” бронз сейминско-турбинского типа из деревни верхняя мульга (юг Красноярского края). *российская археология* No.3. стр.141-143.
- Матющенко, В. И. и Сеницына, Г. В. 1988 *Могильник у д. Ростовка вблизи Омска*. Изд-во Томского университета.
- Черных, Е. Н. Кузьминых, С. В. 1989 *Древняя металлургия северной евроазии*. Наука.